

# ソフトウェア産業の危機 と オープンソース

NTTコムウェア(株)  
長野 宏 宣

## 目次

1. ソフトウェア産業の現状
2. 危機的な状況
3. 中国とインド
4. アジアへの広がり
5. OSSの動向(欧米、アジアと日本)
6. OSSビジネスモデルの創造
7. OSSによるソフトウェア開発環境
8. 今後の動きとCOBOL

## ソフトウェア産業の状況

- 外資系基本ソフト: MF,組込を除くと殆ど全部
- 外資系PKGソフト: 大物は殆ど
- スクラッチ企業アプリ: Sierの生き残りの場?
  - 大企業はPKGシフト、OSS様子見
  - 官庁はOSSシフト
    - ビジネスはシュリンクする一方
- ハードウェア価格破壊の進行: 基盤ゆらぐ
  - トータルソリューションビジネスの崩壊

## 危機的な状況

- 顧客数縮小(少数勝ち組)
- PKG化: 規模縮小
- OSS化: 付加価値必須
- 旧ビジネスモデルの崩壊
  - 派遣ビジネス
  - オフショア開発
- リスク増大: 個人情報保護
  - 各種証明のためのオーバーヘッド増大

## 顧客数減少

- 都市銀行、保険会社の合併
  - 最優良顧客数の激減
  - 統合、移行で特需ビジネス: いずれは無くなる
  - SI供給側も縮小必須: 生き残り策
- 官庁のITのあり方にメス
- NTTグループの体力減小
  - 当面のNGN化に期待
  - OSS化の動向
- ASP(共同利用)の静かな普及: ASPICJのHP参照

## 中国とインド

- オフショアで世界を席卷
  - 日本語のバリアを超えて接近
- 膨大な、安価で超優秀な人材
- 大企業はそれぞれにビジネス化を志向
- 大規模顧客は直接のコンタクト
  - リスク承知で活用
  - 現地合弁会社設立
  - 欧米はネット経由で監視保守

## インド VS 中国

言語バリアー無し VS 色々な言語  
離職率低い VS 転職率高い  
オープンマインド VS 国家教育  
国際ルール遵守 VS ルール変更リスク  
民主主義(かめ) VS 一党支配(うさぎ)  
最下層は無視 VS 全体を救う重さ  
カースト VS 一党独裁

## アジアへの広がり

- 更に安価でリスクの無い諸国へ
  - ベトナム、スリランカ、タイ
- ネットワークによる国境の崩壊
- OSSの潮流

## OSSの動向

- 欧州：国、市などが積極的に導入
- 米国：企業主体、DODの端末（テロ以来）
- アジア：中国（政府振興、大学教育、紅旗Linux）
- 日本：自治体（長崎県）、企業（ドコモ、UFJ銀行）、他
  
- 北東アジア（日中韓）OSS推進フォーラム
  - 官と民による3カ国のOSS導入推進
  - 日本OSS推進フォーラム
    - 人材育成が鍵？

## OSSビジネスモデルの創造

- 一般論では、メンテビジネス
  - 保証の無いOSSの検証と保守を請負う
    - 投資体力：事前検証
    - 継続体力：割り勘顧客の確保
    - 技術者育成確保：優遇しないとスパınアウト
- カーネルからAPまでトータルビジネス化
- OSSアプリケーションビジネス（日本で！）
  - 食材調達ネットの事例：ニュートーキョー他
  - ORCA：日本医師会
  - 金融PKG
- OSSベンチャーの成功：VALSJ、TenArtni

## OSS採用の注意事項

- 知的財産権の問題を良く知る
- コミュニティとの付き合い方
  - Give more than Take
  - 企業としての行動規範(Policy)
    - JISAで指針作成
  - 個人と企業の折り合い
- 人材育成
  - 技術で認められる人材の活躍
  - 英語:国内で閉じていてはダメ、世界と勝負

## OSS取り組みのレベル

- レベル1は単なる利用者:Takeのみ
- レベル2~4:企業としての取り組みが必須
  - OSS Policy作成、実施:JISAで指導書を作成、公開
  - OSSマネージャーの設置
- レベル1に留まる大会社:
  - Community活動が理解できない:特に上級幹部
  - 日本でもベンチャーはレベル4まで実施
  - Takeを担当者任せにしていると、リスク大!
- ソフトウェア産業再興、技術力強化には:
  - レベル2~4への取り組みが必須!

## レベル1

- OSSを利用してシステムを構築
  - OSS利用技術者が必要
  - 評価して使うだけ
  - せいぜい文句を言う位:バグなど
  - アジアは使うだけの国々
    - オーストラリアを入れてもせいぜい数%の貢献
  - Take more than Giveでは
    - 尊敬されない
    - いずれ非難される恐れ

## レベル2

- OSSを利用してPKG作成
  - OSS利用・開発者が必要
  - Policyが必要
  - Community活動に参画
    - 人的交流と根回しの世界
  - ビジネス化:知的財産権には敏感に
    - Software Freedom Law Center: 開発者の法的支援
    - Black Duck Software社: ライセンス違反の検出

## レベル3

- 自社ソフトをOSS化
  - ビジネスモデルの確立
  - OSS開発のリーダーが必要
  - Policyは必須
  - Community活動を推進
    - 各種会議に参画して主張
    - 同調、利用者、開発参画者
    - IBM, HP, Intelなどのやり方

## レベル4

- OSS開発に参加
  - OSS開発者
  - Policyが必要
  - Community活動が必要
    - 世界との勝負
    - 技術力、英語、自己主張
      - VALSJ:カーネルカンファレンスに招待される(2名)
      - IBM, HP、Intelは数十人で競り合い



## OSSによるソフトウェア開発環境

- Eclipse
  - 元はIBMによる開発環境のOSS化
  - 日本コミュニティ設立
    - NTTコムウェア、日本IBM、日立、富士通、NEC
  - 上流モデリングから保守までサポート
  - プラグイン(API公開)でツール間を連結
    - フリープラグインが700公開されている。
  - OSフリー(Windows、UNIX、Linux)
  - 外注パートナーとのコンテンツ共有シームレス化
  - 急速に普及中(Java開発者の7割が利用): 欧米並

## 今後の動きとCOBOL

- Eclipse: Java、C、C++から
  - COBOLの扱いが課題: プラグイン作成
  - 国内でも
- 大規模COBOL-APをどうする?
  - C変換: 実例あり(半自動)
  - Linux上にCOBOL環境を移植
    - 開発ツール(コンパイラ)、実行環境
- OSS化をどう消化するか
  - 技術力が回復が鍵 => 人材育成